



錦鯉の金漆器と、安定生産の為の塗師風呂開発



ウッドデザインの進化を訪ねて 「曲げ」の技で未来を編む ～ストーリーオが挑む木材利用の新領域

国魚・錦鯉の発祥地である小千谷の文化的背景から生まれた錦鯉のぐい呑み。輪島塗り職人との協業により生まれたこの作品は、新たな多色漆と金箔の重ね塗りを施しており、とても美しい。海外へ発信すべき日本の木の文化や技術、デザインを称えるものとしてウッドデザイン賞2025から新たに創設された「日本の技・文化特別賞（日本ウッドデザイン協会会長賞）」の栄えある初代の栄誉に輝いた。

漆器への挑戦と能登との縁
開発のきっかけは、小千谷の象徴である「錦鯉」。「泳ぐ宝石」として世界中で愛され、この地では国宝級の価値を持つ鑑賞魚として振興される。「錦鯉が国の宝として認められたのなら、そのお祝いにふさわしい、本気の器が必要だ」。ストーリーオ株式会社代表、木村和久さんはそう考えた。

「元家電メーカーのエンジニアという経歴を持つ木村さんが求めたのは、単なる漆器ではなかった。夏の野池を悠々と泳ぐ錦鯉の生命力、その鮮やかな赤と深い緑のコントラストを、現代的な感性で表現すること。目指したのは、印象派の絵画のような光と影が交差する抽象的な漆の加飾だった。

しかし、分業制が徹底された漆器の世界で厚い壁にぶつかる。関係者は「前例がない」「漆の性質上難しい」と難色を示した。唯一、石川県輪島市の職人・塗師屋一松さんが「面白い、やってみよう」と手を挙げてくれた。全工程を一貫して担うものづくりの情熱が、小千谷の木と輪島の漆を結びつけた。

益を、山にや職人に返さなければ森は守れない」。

伐採から販売までをバリューチェーンでつなぎ、経済循環を生み出すプロジェクトで大白川生産森林組合は、令和7年度農林水産祭で林産部門の最高賞である天皇杯を受賞するという快挙を成し遂げた。

森を「自分ごと」にする感性の連帯

木村さんがいま最も力を入れているのが、「ホームフォレスト運動」という、消費者と森を精神的に繋ぐ活動だ。

「多くの人にとって、森は遠くにある風景でしかありません。でも森が自分の故郷のように愛着のある場所になったらどうでしょうか。自分が使う道具が、どこの山の、誰が切った木からできているかを知る。それだけで、モノへの愛着は次元の違うものになります」。



森を自分事化することが大切。上は雪上伐採の様子

スノーピーチプロジェクトでは、冬の厳しい雪の中で、伐採した木を人力のソリで運び出す「小出しボランティア」を募っている。氷点下の静寂の中、自分たちの手で木を運び、その重みと冷たさを肌で感じる。この泥臭い体験こそが、都市に住む人々と森を繋ぐ最強のコネクターになる。

当初は数人だった参加者は、今や7

0名を超えるまでになった。参加者の顔ぶれは、製品の愛用者から学生、クリエイターまで幅広い。彼らにとって、ストーリーオの製品を手にする事は、単なる消費ではない。大白川のブナの森を共に守り、育てるといいう「運動」への参画なのだ。

ストーリーオの工房を訪れると、NC加工機が唸りを上げる傍らで、木を曲げ微調整する職人技が見られる。そこにあるのは、デジタルによる「精度」と、自然素材による「不確かさ」の高度な融合なのだ。

木村さんは言う。「自然のものを自然として、価値のあるものとして使っていく。そうした文化が日本に根付くことが一番大事だと思っています」。

小千谷という豪雪の地から、能登の被災地へ、そして都市のオフィスへ。ストーリーオが提供しているのは、都市が忘れてしまった「自然との対話の作法」である。「曲がる木」が描くしなやかな曲線は、山と人が緩やかに共生する未来を描いている。



エンジニアとして培った技術を活かして開発した、軽量化・可搬性を備えたぬし風呂(下)

だが開発が軌道に乗り始めた矢先、能登半島を未曾有の震災が襲う。さらに追い打ちをかける大水害。「一松さんの工房も壊滅的な被害を受け、漆器作りにおいて最も重要とされる「ぬし風呂(漆を乾燥させる回転装置)」が損壊してしまっ

た。漆は、ただ置いておけば乾くわけではない。一定の温度と湿度を保ちながら、重力で漆が垂れないようにゆっくりと回転させ続ける必要がある。ぬし風呂がなければ漆器生産は進まない。修理業者も復興作業に忙殺され、途方に暮れる一松さん。窮地を救ったのは、木村さんの「エンジニア魂」だった。

「中越地震を経験した私たちは、ボランティアが去った後の静寂や、やりたいことができない焦燥感を痛いほど知っている。今、自分にできることは何か、を考えたい」。

木村さんは家電メーカーで培った制御技術を活用してぬし風呂開発を進めた。結果、新しいコンセプト「モバイルぬし風呂」を設計・開発。従来の巨大な固定式装置の概念を覆し、容積を9分の1にまで圧縮、大人2人で運べる約60キロという軽量化を実現した。

さらに、職人の長年の勘に頼っていた温湿度の管理をデジタル制御化。色によって異なる繊細な硬化条件をデータ管理することで、避難先の仮設住宅や限られたスペースでも、最高品質の漆器を硬める事が可能になった。「場所を選ばずに仕事ができる。それは職人の尊厳を守ることでもある」。デジタル技術と、伝統の融合によって、受賞作品が生まれたのである。

マテリアル・コントロールへのこだわり

ストーリーオの技術的核となるのは、硬い広葉樹を極小の半径で曲げ、かつ「復元力(バネ性)」を持たせる独自の加工法だ。なぜ「曲げ」にこだわったのか。その裏には、エンジニアらしい徹底したマテリアル(素材)へのこだわりがある。

創業当初、木村さんは品質の安定した輸入材を使用していた。しかし、ある時を境に、同じ種類の木材であるはずなのに、加工精度が著しく低下するという状況に直面した。

「工業製品を作る者にとって、素材の物性が変わることは致命的です。なぜ変わったのかを突き詰めると、山の斜面の向き、伐採の季節、乾燥の工程など、私たちがコントロールできない膨大な変数が隠れていました」。

ならば、自分たちの手の届く範囲で、素材の明らかかな木を使うしかない。木村さんは自ら山に入り、地域の未利用材に目を向けた。しかし、国産の広葉樹は節が多く、乾燥時に反りやすく、扱いが難しい。そこで彼は、「曲げる」ことで木の繊維を整え、意図した通りの形状と機能を固定する技術を編み出した。木が本来持つ強靭さを「しなり」へと変える。



ランプ(上)ハンドグリップ(下)など独自の曲げ技術を活かした付加価値の高い製品開発

この逆転の発想により、ストーリーオの製品は、いずれもウッドデザイン賞の受賞作品である「TANZAKU LAMP」「曲木のマウスパッド」「卓上ハンドグリップ」といった、美しい曲線を持つ精密なプロダクトへと昇華していった。それは、輸入材に頼らずとも、地域の木材で世界に通用する付加価値を生み出せることの証明でもあった。

スノーピーチプロジェクト:木と森でつながる「経済の循環」

この技術が最も鮮やかに結実したのが、魚沼市大白川のブナを活用した「スノーピーチプロジェクト」だ。かつてブナの森は、薪や炭としてのエネルギー源だった。しかし化石燃料への転換により需要が激減、広葉樹の森は次の活用を待っていた。

新潟大学などと連携して始まったこのプロジェクトでストーリーオは「出口(製品化)」の役割を担った。ブナを独自の曲げ加工で洗練されたデザイン家具やステーションナリーへと変貌させた。特筆すべきは、その経済的インパクトである。ストーリーオが手がける製品は、一般的な輸入材のプロダクトと比べて10倍近い付加価値で市場に受け入れられている。

「林業をボランティアで終わらせてはいけない。再生産が可能になるだけの利



現場では手加工で細部の調整をする(上)ストーリーオ代表の木村和久さん(下)